

シネマ

シネマ・ニュース
November.2000 No.52

特集

戦争を描く

特別企画

90年代の 中国映画

映像セミナー

フィルム・ネット・ワークス
～さまざまな現在形

11



爆弾を抱えて準備万端。あとは敵が来るのをひたすら待つのみ。
派手に散るのも、じりじりと不発で終わるのも、人生である。

『肉弾』 イラスト&文:山下良平

90年代の 中国映画

特別企画

中国映画第6世代の監督たちを含む、
注目の中国映画90年代の作品群

会期：15日(水)～26日(日)

※休館日・休映日を除く

観覧料：800円(大人)/600円(大学生・高校生)
400円(中学生・小学生)

※定員制、各回入替制。

※チケットはすべて当日券です。前売り券はありません。

※福岡市在住の障害者の方、及び福岡市在住の65歳以上の方は
400円。(手帳の提示が必要です。)

中国映画は80年代中頃、第五世代と呼ばれる作家達の登場により、国際的に高く評価されるようになった。その中からチェン・カイコーやチャン・イーモウといった、現在も世界的に活躍する巨匠が登場する。しかしその後80年代後半からの経済開放政策の影響もあり、第五世代の監督達とはまったく異なった作品が登場するようになる。彼ら、第六世代と呼ばれる監督達の特徴は、文革を経験していないこと、中国の経済的な安定期、高度成長の恩恵を受け、欧米的な感覚を身につけていることにある。従来の中国映画にある社会の中の個人という発想から、個人を中心にした映画の発想への転換である。今回の上映作品では「正義の行方」「太陽の少年」「硯(すずり)」が第六世代監督の作品にあたる。中でも「太陽の少年」のチャン・ウエン監督は、元々は「芙蓉鎮」「紅いコーリャン」の俳優として有名であった。監督デビュー作の「太陽の少年」から注目され、監督第二作「鬼子来了」は今年カンヌ映画祭でグランプリを受賞、すでに国際的な監督となっている。

もう一人、90年代の中国映画で忘れてはいけない監督がニン・インである。彼女の「北京好日」「スケッチ・オブ・Peking」は90年代の中国映画の傑作とあって良いだろう。59年生まれのニン・インは世代的には第五世代に近い。しかしイタリアで映画を学び、ベルトルッチの「ラスト・エンペラー」で助監督を務める等、その映画感覚は女性的であると同時に欧米的でもある。

また90年代の中国映画は、経済的な豊かさの中で変化する社会が捉えられていることが大きな特徴とも言える。今回の特集上映でも、中国文化という巨大な伝統と揺れ動く社会を感じることができるだろう。

15日(水) 14:00/18日(土) 15:00/24日(金) 14:00

北京好日

For Fun

監督：寧瀛(ニン・イン)

出演：黄宗洛(ホアン・ツォンルオ)

1992年/35ミリ/カラー/93分/中国



日本語字幕付き

妻を亡くして一人暮らしの老人が、素人の老人達を集めて京劇の劇団を作り、お祭りのコンクールに出演する。ドキュメンタリー的な手法で北京の街角の人々の思つかいを伝えた作品。東京国際映画祭ヤングシネマグランプリなど世界中で絶賛された傑作。

15日(水) 19:00/19日(日) 15:00/25日(土) 11:00

太陽の少年

In The Heat Of The Sun

監督：姜文(チャン・ウエン)

出演：夏雨(シア・ユイ)

1994年/35ミリ/カラー/128分/中国



日本語字幕付き

70年代の北京、16才の少年・シアオチュンは退屈な学校から抜け出し、煙草を吸ったり女の子をナンパしたりしていた。そしてある日出会った少女・ミランに恋してしまう。「紅いコーリャン」の主演俳優、チャン・ウエンの監督デビュー作で、監督の少年時代が投影された作品。ヴェネチア映画祭主演男優賞受賞。

16日(木) 14:00/19日(日) 11:00/24日(金) 19:00

麻花売りの女

Ermo

監督：周曉文(チョウ・シアウエン)

出演：艾麗婭(アイ・リーヤー)

1994年/35ミリ/カラー/95分/中国



日本語字幕付き

働き者で負けん気の強い主婦のアルモは、毎日出来たての麻花菓子を町まで売りに行く。ある日隣の家がカラーテレビを買い、アルモの息子は隣の家に入り浸りになってしまう。アルモは大型テレビを買うために懸命に働き出す。お金に振り回される現代中国を風刺的に描いた作品。ロカルノ映画祭審査員大賞受賞。

16日(木) 19:00/23日(木・祝) 15:00

香魂女—湖に生きる

Oilmaker's Family

監督：謝飛(シエ・フェイ)

出演：斯琴高娃(スーチンカオワー)

1993年/35ミリ/カラー/105分/中国



日本語・英語字幕付き

香湖湖の畔でゴマ油工場を営む女主人のアルサオの気がかりは、22才になる知恵遅れの息子のこと。家業を絶やすわけにいかないアルサオは、借金の質としてホアン・ホアンを息子の嫁にする。売買婚により嫁いだ主人公が、家のため売買婚を行うという悲しい矛盾が描かれる。ベルリン映画祭金熊賞受賞。

17日(金) 14:00/23日(木・祝) 11:00/25日(土) 15:00

正義の行方

The Accused Uncle Shangang

監督：範元(ファン・ユアン)

出演：李仁堂(リー・レンタン)

1994年/35ミリ/カラー/109分/中国



日本語字幕付き

30年来犯罪のなかった、四川省の山奥の村。人望厚い党支部書記の家の前で女の自殺者が出る。この事件を調べる女性検察官スーチンは、事情聴取を進める内に次第に村の人々の内情を理解する。中国の山村を長年支配してきた封建的体制を批判し、センセーションを巻き起こした作品。

17日(金) 19:00/22日(水) 14:00/26日(日) 15:00

新北京物語

The Strangers in Beijing

監督：何群(ホー・チュン)

出演：張国立(チャン・クオリー)

1995年/35ミリ/カラー/106分/中国



日本語字幕付き

北京の出版社につとめる地方出身の社員達の物語。単身赴任の編集者・サーシンに住むアパートには、本の装丁を任されているチーツや、流行歌の作詞・作曲をするイー・リー等が住んでいた。この映画は大会社の中で混ざり合って生きる、インテリ達の混迷が描かれた都会派風俗劇で、多くの観客の支持を得ている。

18日(土) 11:00/22日(水) 19:00/26日(日) 11:00

硯(すずり)

Ink Stone

監督：劉冰鑒(リウ・ピンチエン)

出演：李濱(リー・バン)

1996年/35ミリ/カラー/89分/中国



日本語字幕付き

蘇州の古い屋敷に一人住む老女が、屋敷の中庭におかれた巨大な硯について、この硯を買いに来た骨董屋に話をする。この硯はかつて皇帝の宮殿にあり、硯がこの屋敷に来てからは彼女と彼女の夫との安らぎの場所だった。張りつめた緊張感で描かれる、中国初の官能ミステリー。

映像セミナー

フィルム・ネット・ワークス ～さまざまな現在形

昨年の「小型映画の世界と現在形」に続き、今回はカナダとアメリカの実験映画の現在形を実際に作品を交えて紹介するセミナーを開催いたします。

カナダ・アメリカの実験映画・個人映画のプログラムを上映した上で、それらを選定したアメリカ・カナダのキュレーターと日本の映像作家による対談形式で行います。海外の実験映画、個人映画の現在形に触れながら、観客も含めたクロス・トークが出来ればと考えています。皆様、ふるってご参加ください。

会場：福岡市総合図書館3階第2会議室

受講料：各回500円(上映資料代相当として)

定員：75名 *受付は当日12:30～

主催：福岡市総合図書館

企画協力：フィルム・メーカーズ・フィールド 森下明彦 映画アーツ

3日(金・祝) 13:00～15:30

カナダ実験映像の現在

「私たちは時間の避雷針だ」

講師/クリス・ゲーマン

(イメージ・フェスティバル芸術監督)

森下明彦

(映像作家 神戸芸術工科大学教員)

※リチャード・リーヴズ「線状の夢」他、全9作品(80分)上映予定



12日(日) 13:00～15:30

アメリカ8ミリフィルムの現在

「スーパー・スーパー・8・2000」

講師/ジョス・ウィン

(映像作家 映画アーツ主宰)

宮田靖子

(映像作家 フィルム・メーカーズ・フィールド主宰)

※マット・ハルス「家に連れていって」他、全11作品(70分)上映予定



1日(水)14:00 3日(金・祝)15:00

ビルマの 罌粟

1956年/35ミリ/モノクロ
106分/日活

監督/市川崑
出演/安井昌二 三國連太郎



戦後作られたヒューマニスティックな戦争映画の代表作。ビルマで英軍の捕虜となった水島上等兵は、終戦を信じずに立てこもる日本の部隊を説得していくが…。

特集 戦争を描く

■ 太平洋戦争などをテーマとした作品群 ■

1日(水)19:00 5日(日)15:00

真空地帯

1952年/35ミリ/モノクロ
129分/新星映画社

監督/山本薩夫
出演/木村功 下元勉



日本陸軍の非人間性が戦場に送り出される以前の教育によって作り出されていたことをリアルに描いた作品。同時に軍上層部の腐敗した構造をも暴き出している。

2日(木)19:00 5日(日)11:00

あの旗を 撃て

1944年/35ミリ/モノクロ
108分/東宝

監督/阿部豊
出演/大河内傳次郎 河津清三郎



フィリピンから米軍を駆逐するまでを描いた戦記映画。おおがかりな現地ロケを行い、フィリピン人と日本軍との交流や敵軍をも描いた力作。植民地教育にも利用しようとした。

会 期：1日(水)~12日(日)

※休館日・休映日を除く

観覧料：500円(大人)

400円(大学生・高校生)

300円(中学生・小学生)

●定員制、各回入替制。

●チケットはすべて当日券です。前売り券はありません。

●福岡市在住の障害者の方は無料。福岡市在住の65才以上の方は半額。(手帳の提示が必要です。)

2日(木)14:00 11日(土)11:00

桃太郎 海の神兵

1944年/35ミリ/モノクロ
74分/松竹動画研究所

演出/瀬尾光世



スマトラのパレンバン攻略における海軍空挺部隊の活躍を桃太郎の童話になぞって動画化。当時の日本動画の最高水準を示し、手塚治虫がアニメ製作を志すきっかけとなった。

3日(金・祝)11:00 8日(水)19:00

五人の 斥候兵

1938年/16ミリ/モノクロ
70分/日活

監督/田坂具隆
出演/小杉勇 見明凡太郎



日中戦争で敵陣偵察に出た五人の斥候兵が敵に発見され、退却中に離れ離れになってしまう。日本の戦記映画で初めて高い芸術性を発揮したといわれる作品。

4日(土)15:00 9日(木)19:00

肉 弾

1968年/35ミリ/モノクロ
116分/肉弾をつくる会=ATG

監督/岡本喜八
出演/寺田農 大谷直子



監督の戦争に対する屈折した想いを人間魚雷に乗り込むことになった主人公の「あいつ」に託し、あくまで個人的な視点でコミカルに、しかし切なく描いた異色作。

8日(水)14:00 11日(土)15:00

ハルハ河の 英雄的な頁

1991年/16ミリ/パートカラー
72分/モンゴル=日本

構成/D・トゥメンバヤル
P・ナラントヤ



1939年のノモンハン事件は、モンゴルではハルハ河戦争といわれている。日本慰霊団のモンゴル訪問を機に作られたモンゴル映画人による同紛争の記録映画。

9日(木)14:00 12日(日)11:00

上 海

1938年/35ミリ/モノクロ
77分/東宝

編集/亀井文夫



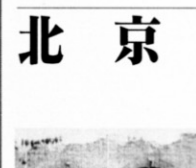
陥落した上海、南京と北京の様子を記録した三部作の一本。撮影の三木茂は戦闘の無惨な跡を丹念に撮影、亀井文夫の編集によって暗に戦争の悲惨さを訴えかけている。

4日(土)11:00 10日(金)14:00

南 京

1938年/35ミリ/モノクロ
56分/東宝

編集/秋元憲



1938年/16ミリ/モノクロ
45分/東宝
編集/亀井文夫
※一部欠落あり



「上海」に続く三部作の残る二本。「南京」は日本軍の華々しい入城までの生々しい戦闘を、「北京」は戦禍を免れた古都の風物の紹介を中心に描いている。

10日(金)19:00 12日(日)15:00

戦ふ兵隊

1939年/16ミリ/モノクロ
66分/東宝

編集/亀井文夫

日本の 悲劇

1946年/35ミリ/モノクロ
39分/日本映画社

編集/亀井文夫



「戦ふ兵隊」は戦時中に作られた間接的表現を駆使した反戦記録映画。「日本の悲劇」は戦時中のニュース映画などを素材として戦後、軍部や軍閥などを痛烈に批判した作品。

映画と戦争は密接な関わりがある。まず日本で映画が普及するきっかけとなったのが1904年におこった日露戦争であった。この日露戦争の記録映画は全国で大大たりし、1903年にはまだ全国に一館しかなかった常設映画館が全国に普及する大きなきっかけになった。しかし映画がもつとも利用されたのは満州事変(1931)から日中戦争(1937)を経て、太平洋戦争(1941~1945)に至る間であらう。国民最大の関心事である戦争は、ニュース映画や戦記映画、記録映画などとして映画化され、これらの映画は絶大な人気を博した。上海事変(1932)の際の肉弾三勇士(上海事変の際、爆弾ごと敵地に突撃、爆死して突破口を開いたとされる)などは戦争美談として新聞などで取り上げられた他、映画各社が競って映画化した。また同じく上海事変の際に中国側の捕虜になったことを恥じ、ピストル自殺を遂げた空閑(くが)少佐の事件も名譽と責任を重んじる軍人精神の発露として持ち上げられ、やはり各社が映画化している。これらは時事ネタをもとにしたいわゆるさわもの映画であるが、当時、肉弾三勇士や空閑少佐の映画をやらなければ各が入らないほどの人気を博した。これに目をつけた軍部の後援や製作、指導などにより、戦記映画や記録映画、

映画と戦争

数多くの名作が生み出されている。1939年には映画法が制定され、映画は文化統制・情報操作の中心として軍部の完全な統制下におかれる。映画評論なども含め、すべてに軍部が介入し、映画会社の統合整理がなされたが、そうしたことから施行当時は歓迎するムードが大勢を占めていた。同時に文化映画(記録映画や教育映画、一部の動画など)の強制上映が義務づけられ、これも国策浸透、国威掲揚などのために利用された。1941年、太平洋戦争に突入する。開戦当初、日本軍は快速進軍を続け、各地の戦果を喧伝する映画が次々と作られ、各地の戦況が悪化し、本土空襲が本格化するに従って情報操作されたニュース映画や戦記映画は説得力を失い、むしろ悲壮感の漂うものに変化していく。それすらも物資不足から思うように作れず、相次ぐ空襲に疲弊した人々は最早、そうした映画を見ることすら少なかった。戦後に入り、戦時中の日本軍の敗戦が次々に暴かれ、戦争そのものに對する批判が起り、こうした視点から映画が作られるようになった。その切り口は様々であり、

